

特定外来生物

ガー科

硬骨魚綱 ガー目 ガー科 Lepisosteidae Gen. spp.

生態系被害防止外来種リストの区分

その他の定着予防外来種

日本の侵略的外来種ワースト 100

世界の侵略的外来種ワースト 100

注: 本県では、ガー科の外来魚類として、アリゲーターガー、キューバンガー、トロピカルガー、スポッテッドガー、ロングノーズガー、フロリダガーの6種が確認されている(2023年時点)。

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植物

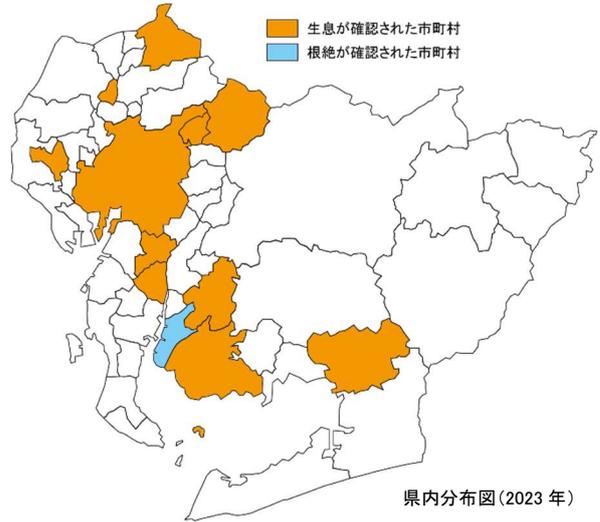
基礎情報

原産地

・北米大陸のカナダ・ケベック州からコスタリカ

現在の分布

- ・海外では、ガー科全7種のうちショートノーズガーのみ移入による定着が確認されている。
- ・毎年のように日本各地で目撃、採捕の情報があるが、自然繁殖を裏付ける情報はない。
- ・県内では、名古屋市堀川やため池、河川下流域での確認事例が多い。



侵入の経緯

- ・ガー科には2属7種が記載されている。かつては、7種すべてが国内のペットショップ等で流通し、比較的ポピュラーな観賞魚として稚魚や幼魚が多く販売されていた。
- ・飼いきれなくなった個体が野外(おもに都市近郊の池や堀、河川など)に遺棄される事例が多い。ペットショップでの購入価格が1990年代以降低下し、飼育が比較的容易になったことも要因と考えられる。

形態

- ・ガー科内での最大種はアリゲーターガーで、最大体長は3mを超える。この他の種についても最大全長1~2mになる。
- ・ワニのような特徴的な顔をしている。
- ・背ビレと尻ビレは体の後方につき、背ビレと尻ビレが互いに向き合う。尾ビレは上下非対称の形で、後端が丸い。
- ・体色は多くの種が黒褐色からオリーブ色で、斑点や模様があるものが多い。



アリゲーターガーの口



アリゲーターガー

生息環境

- ・河川の淀み、流れの緩いところを好み、特に水草の多い浅場に生息することが多い。
- ・ため池や名古屋城の外堀で確認、捕獲された事例もある。

生態・ライフサイクル

- ・動物食で仔稚魚期に動物プランクトン、水生・陸生の昆虫、甲殻類を捕食する。細長い口は動きが俊敏な小型魚類を捕らえることに適しており、成長すると主に魚類を食べるようになる。
- ・空気呼吸が可能で、酸素の少ない環境でも生息することができる。汽水域にも生息が可能で、特にアリゲーターガーは海域や塩性湿地に生息する個体群も存在する。
- ・繁殖期は5月から6月頃とされ、岸辺近くに繁茂する水草や砂礫に産卵する。
- ・寿命は数十年に及ぶとされる。



かつて生息が確認された名古屋城外堀

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

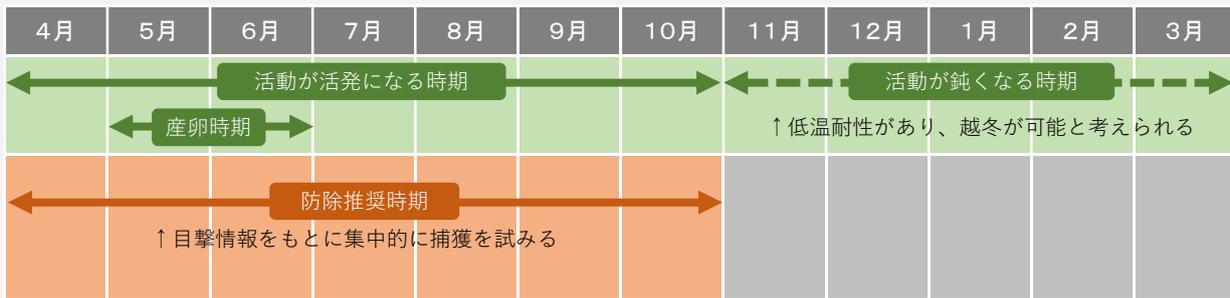
甲殻類

クモ類

貝類

植物

【ライフサイクル・防除推奨時期】



類似種との識別ポイント

- ・日本在来の類似種はいない。外来種でやや類似する大型の種として、カムルチーがいる。

カムルチー（外来種）



①ヘビに似た頭

②2列に菱形の暗色斑が並ぶ

- ①全長 80cm に至る。体は細長く、頭はヘビのよう。
- ②体側に2列にニシキヘビのような菱形の暗色斑が並ぶ。

ライギョとも呼ばれ、一見ナマズに似る細長い魚である。魚食性が強く、各地（本県を含む）の内水面漁業調整規則で移入が禁止されている。

中小規模の河川、水田水路、ため池等で見られる。春から夏に浮葉植物を利用して巣を作り、浮性卵を産む。幅広い温度耐性を持ち、空気呼吸も行うため、酸素の少ない環境でも生息することができる。主に魚類を捕食するが、昆虫類、カエル類、甲殻類も捕食する。親魚が卵や仔稚魚を保護する。

冬季の低水温にも耐えられ、かつ繁殖力も比較的強いため、日本各地に広く定着している。

影響・被害

- ・魚食性の強い肉食性で、大型になり寿命も長い。野外に定着した場合、長期間にわたって捕食や競合により在来の生態系や漁業に被害を及ぼす可能性がある。大型化すれば天敵はほぼ存在しないと推測され、ガー科魚類の定着を未然に予防することは重要である。
- ・ガー科魚類は環境適応力が高いため、一般的な日本の河川及び湖沼において越冬・繁殖できる可能性がある。本県では、2003年以降にガー科魚類の生息が各所で確認されている。これらのうち、フロリダガーおよびアリゲーターガーは1月に生体で捕獲されていることから、低温耐性があり、本県においても十分に越冬が可能と考えられる。このため、複数個体が遺棄された場合は繁殖のおそれがあると推測される。

生息・被害の確認方法

- ・目撃情報をもとに水際を踏査、またはボートを用いて水面近くを泳ぐ個体を目視確認する。双眼鏡等を併用するとよい。
- ・住民からの目撃情報の収集など、早期発見できる体制を整えることが重要と考えられる。
- ・既存の研究調査に関する文献や目撃情報をインターネットや図書館で探す。
- ・地域の住民や農業・漁業従事者、専門家などを対象に聞き取りやアンケート調査を行う。



ボートによる確認

防除方法

- ・飼育個体が野外に放されないよう周知を徹底する。
- ・住民が野外で偶然発見した場合、怪我をするおそれがあるため、近づいたり、無理に捕獲したりしないよう注意する。できれば写真を撮影するよう依頼する。
- ・確認された個体は、専門家のアドバイス等を受けつつ捕獲に努める。

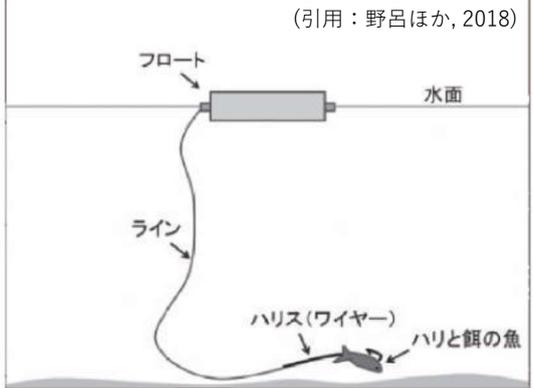
推奨時期

- ・水温が上がり活動が活発になる4～10月の防除が推奨される(水温が低い冬は活動がにぶくなる)。
- ・本県での野外での繁殖は確認されていないが、一般に産卵時期(5～6月)に捕獲すると、卵を産む成体メスを捕獲できる可能性がある。

具体的な防除方法

- ・住民が野外で偶然発見した場合、不用意に近づくことは危険なため、無理に捕獲することはせず、可能な限り写真を撮影してもらい詳細な確認場所を伝えてもらう。
- ・名古屋城外堀での捕獲事例(野呂ほか, 2018)では、刺網、ジャグライン(原産国で使用されている仕掛け)が用いられた。なお、在来の水生動物(魚類、カメ類)も捕獲(混獲)されるため注意を要する。
- ・捕獲した個体は殺処理する。殺処理の方法として、氷締め、陸上での窒息、物理的な殺処理(頭部打撃、血抜き締め等)がある。また、大学や水族館等の研究機関に提供した事例もある。
- ・殺処理後の最終処理は、一般廃棄物として廃棄する(各自治体の基準に従う)。

【捕獲方法の種類】名古屋城外堀での捕獲事例（野呂ほか，2018）より

種類	刺網	ジャグライン
概要	目撃情報が得られた場所に刺網を設置。	棒状のフロートに釣りの仕掛けを直付し、それをポイントに流していく方法（置き針、流し針）。
捕獲方法	3種類の網（3枚網2種と1枚網）を使用。目撃直後にボートを使って目撃場所に刺網を設置。	ジャグライン20基を設置。岸辺などに固定せず、フロートを水面に流したままにする。エサは小型のアジ等を使用。2時間おきに見回り、エサの付け替えを実施。設置・見回り・回収にはボートを使用。
形状等	 <small>（1枚網：他地域での事例写真）</small>	 <small>（引用：野呂ほか，2018）</small>
捕獲結果	2日間設置したが捕獲できなかった。	設置から3日後に1個体を捕獲。
費用	漁網店にて購入可能。費用は種類やサイズにより様々。	一基あたり材料費500円程度で自作
留意事項	刺網の上部を乗り越えて通過していく個体が確認された。	最終的な取り込みには刺網を併用した。アカミミガメ等によりエサが頻繁に取られた。

哺乳類
鳥類
は虫類
両生類
魚類
昆虫類
甲殻類
クモ類
貝類
植物

作業上の注意点等

- ・防除作業を行う前に、対象地の所有者・管理者の承諾を得る。必要に応じて、地域住民にも防除の目的や活動内容を周知する。
- ・生きたまま保管・運搬等することは原則禁止されているため要注意（行う場合は手続等が必要）である。
- ・口に針のように鋭い歯が並び、体表にぬめりがあるため、手でつかむ際には保護手袋（軍手等）を着用し、頭の近くに手を近づけないようにする。
- ・触った後は必ず石けんなどを使って十分に手洗いをする。



針のような鋭い歯

（写真提供：谷口義則氏）

必要な法令上の手続き等

- ・愛知県漁業調整規則に基づく特別採捕許可（漁法や漁具により必要となる場合がある）

出典・参考資料

- ・侵入生物データベース > 日本の外来生物 > 魚類アラートリスト > ガー科（国立研究開発法人 国立環境研究所）
https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/atoc5_fishes.html
- ・特定外来生物同定マニュアル 魚類（環境省 自然環境局）https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/manual/5hp_gyorui.pdf
- ・ガーバイクを川や池に放さないで！（環境省 自然環境局,2018）
- ・愛知県の外来種 ブルーデータブックあいち2021（愛知県,2021）p.61 ガー科（谷口義則・地村佳純）
- ・STOP！移入種 守ろう！あいちの生態系 ～愛知県移入種対策ハンドブック～ 付属資料 愛知県の移入動植物 ブルーデータブックあいち2012（愛知県,2012）p.89 カムルチー（谷口義則）
- ・名古屋城外堀におけるアリゲーターガー *Atractosteus spatula* (Lacepède, 1803) の捕獲。なごやの生物多様性 5: 65-73。（野呂達哉・鶴飼普・宇地原永吉・岡田健士朗・酒井正二郎,2018）